

# 日常概念の中国問題

戸 曉輝

HU Xiaohui

翻訳：西村 真志葉

近年、中国では日常という概念が異なる分野から注目を浴びている。多くの場合、国外の日常概念をそのまま中国へ持ち込んで中国人の日常生活研究に用いているが、こうした研究は中国人の日常生活に生じた新たな変化を指し示してくれはするものの、最も根源的な中国固有の問題には言及していないのが実情である。一方、中国民俗学はドイツ民俗学の日常概念を簡単に導入するのではなく、まずその理論的前提と実践的条件に内省を加えた上で、日常概念を通じて、中国特有の問題に光を当てている。

ドイツ民俗学のヘルマン・パウジンガーは次のように考える。「日常生活は私たちが何ら省みることなく活動する空間であり、私たちは夢の中で歩くようにその道を歩き、何の不自由もなく直接その意味と状況を理解する。人々はここでやりたいことを行うが、その行為は自然であるという特徴を備えている。ここでは行為の意味に関する見方が、暗黙の了解で他者と共有される」[Bausinger 1996 : 33, 戸 2010 : 346]。また、テュービンゲン学派の日常 (Alltag) という概念は、主としてシュッツ等の知識社会的な意味における (即ち主体間で常識を共有する) 経験的次元を指すのではなく、ルフェーヴルの理論に基づいて平淡で味気ない日常生活を指すと考える者もいる。その核心を占めるのは歴史の客観的構造ではなく、日常生活に対する個人の主観的感受性とミクロな体験だと考えるのである [Szymanska 2008 : 80]。もちろん、中国にもいぜんとして日常性と直接性の両側面から生活世界を理解し、次のように考える民俗学者もいる。「ヘルマン・パウジンガー、ヴォルフガング・カシューバのもとで生活世界は哲学的な意味を持たない。(略) 彼らが言うところの生活世界とは、我々中国人が理解している現象レベルの現下の日常生活のことである」[王 2013]。しかし、ドイツの民俗学者が歩みを止めた場所こそ、まさに中国民俗学者が歩み始めるべき起点だと筆者は考える。少なくとも、彼らが日常概念の実践的条件をほぼ省みなくなった時、中国民俗学者はこうした実践条件について考え、それを確立し、そして実現すべきだろう。

おそらくは同じ理由からであろう、1994年、若手民俗学者であった高丙中はドイツ民俗学から直接日常概念を導入するのではなく、その主要な出所の一つであるフッサールの生活世界概念まで立ち戻った。そして、「民俗学が最初にこの世で独立した学問として身を立てようとした時、与えられた世界は専門家現象の外にある世界、つまりフッサールが言うところの“生活世界”であり、“生活世界”という完全な概念を手に入れた今、民俗学の対象領域は二度とバラバラに見えることはないだろう」と考えたのである[高 1994 : 127, 138]。ただ遺憾なことに、その後十数年にわたり、中国人民俗学者の多くは経験的・実証的な立場から高丙中の思想を理解し続けたが

ために、民俗事象の静態的研究から動態的研究へと転向してゆくばかりで、理論的な思索を継続する者は少なかった。2006年に至って、ようやく呂微がさらに踏み込んで、フッサールの生活世界の主な意味は、人間の科学世界に先行し、科学世界の前提と基礎となる未分化の、主観的かつ相対的な、日常意見的(直観経験的)な周辺世界と観念世界だと指摘した。また呂微は、性質世界と意味世界を区別するために、生活世界を先験的自我の純粹意識によって構成され、日常生活世界よりも根幹的な原始的生活世界であると理解した[呂 2006]。2008年には筆者も『民俗と生活世界』と題した論考の中で、生活世界は日常生活とは異なり、日常生活に先験的な基礎を与えるものだと述べた。そして、民俗学は生活世界を描写する科学として、経験的・実証的な意味における客観的科学ではなく、あくまで超越的科学あるいは超越論的科学であるべきだと主張した[戸 2008]。また、民俗学における生活世界を日常的生活世界と原始的生活世界に区分して捉えようとする学者もいる[丁、韓 2008]。

こうした思索は多少の議論を引き起こしたものの[張 2011、邵 2012、王 2014]、多くの中国民俗学者は、なぜ筆者たちがこのような区分を設け、なぜ日常概念の実践的条件とその理論的基盤についてこうも強調しなければならないのか、理解してはいなかった。筆者たちが思索を続ける根本的かつ客観的な理由、それはドイツではすでに完備しているがゆえに取りたてて議論する必要もないこの実践的条件が、中国の日常には欠落している、という点にある。中国で民俗学研究を行う際、地味で人目を引かない日常性に着目するだけでは、日常生活が研究に値することを十分に理由付けできない。また、未研究の日常生活事象を取り上げて空白を埋めても、たとえ他の研究者に見えないものを見たとしても、学術的に大きな価値があるとは限らない。さらに言えば、日常という概念がドイツから中国へやってくる際に、そのコンテクストは根本的に変化している。概念の導入が簡単な移植で終われば、根源的な中国固有の問題は覆い隠されてしまうだろう。

以下、この点を詳しく説明しよう。

(1) まず、現実において、中国とドイツ語圏諸国には根本的な差異が存在する。ドイツ語圏諸国の日常はおおよそ法的制度により客観的に保障されており、その国の民俗学者は日常の実践的条件について議論せずとも、直接日常という概念を用いて日常生活のミクロな描写を行うことができる。しかし中国では、現行の制度や生活形式の保障、さらには人権、民主、平等、法治といった現代で公認される価値観についての共有知識が、いぜん完全に制度化されていない。だからこそ、日常がむしろ常に非ずというのが中国の常態なのであり、私たちの日常を正常化し、正当化し、また合理化することがこれほどまでに難しいのだ。中国人の日常が主観的な感受性やミクロな体験に乏しいというわけではない。ただ、その性質が根本的にドイツ語圏諸国と大きく違うのである。言い換えれば、中国の日常にはドイツ語圏諸国のような実践的条件や制度的保障が欠如している。あちらの学者が日常の主観的な感受性やミクロな体験をいかに繊細に、十分に表現するか考えている時、中国の普通の人々とはいえば、自身の本来有している常識や公平性、正義に関する感覚が日常生活のなかで普遍的に認められることは少ないし、それを公に表現することも難しいのである。また、ドイツ語圏諸国の研究者がアクセル・ホネットのようにすでに「法定自由の病理」について議論している時[霍耐特 2013: 138-151]、我々中国民俗学者はいぜんとしてこうした自由を勝ち取るために尽力しなければならない。そしてこの時、何よりも先に、まず理性的な常識が公認されるために奮闘する必要がある。このような実践条件がなければ、日常生活は正常に営まれない、いつどこで非常へ変わってもおかしくはないのだ。最大の中国問題は、こうした実践のための前提が欠落していることである。私たちはこの実践的前提を、中国の現実へ

と変えてゆかなければならない。これによりようやく中国の日常は正常であり続けることができ、非常へ転落するに至らずに済むのだ。

(2) ドイツ語圏諸国の日常は制度的な前提によって保障されているために、学者は日常の目的条件について議論しなくとも直接課題へ向かうことができるわけだが、しかしこのことは却って彼らの理論に不徹底さをもたらしている。言い換えれば、生活世界と日常の哲学的意味を放棄したのは彼らの長所ではない、それはむしろ欠点なのである。我々はこの不足を補いたいと考える。というのも、日常生活と生活世界を区別する理論が、以下のような理由から必要とされるためである。

生活世界は我々が経験的な日常世界を理解するために考え出した、経験に先行する純粋な観念の世界である。私たちが現実世界を理解するための基準あるいは前提であり、コミュニケーションの主体の生活世界について議論するということは、普通の人々の日常生活が何をもちて当たり前とされるのか論証しているのに等しい。……普通の人々、庶民の日常生活はなぜ当たり前なのか、それは普通の人々、庶民自身が、経験的な実践に先行して、自由や平等の理念を自らの日常生活に取り込んでいるからである(たとえそれが無自覚であったとしても)。これにより、普通の人、庶民の日常生活に差異が表出されるのだ[呂 2013]。

私たちはまず、「普通の人々、庶民が、経験的な実践に先行して、自由や平等の理念を自らの日常生活に取り込んでいる」という事実を受け入れ、認識しなければならない。そして、「自由や平等の理念」を日常生活的実践の法則、政治秩序の目的条件として、位置づけなければならない。さらに、人間を手段と見なすだけでなく、同時に、人間を目的と見なし続けなければならない。そうすることによってのみ、一人ひとりが生活のかたちを選択する自由と権利は客観的な制度に保障され、また、民俗の民を生活世界を構築する能力を有した平等な主体として位置づけるための理論的条件を創造することが可能となるのである。そこではじめて、中国の日常も十分かつ正当な当然性を有することができるので、これがかたかなければ、今後さまざまな理由付けや言い訳に縛られ続けてしまうことだろう。

(3) 高丙中は生活世界という概念を通じて民俗に経験的な総体性を付与できると考えたが、この考えを元に、筆者は呂微とともに、さらに先験的な総体性を加えようと試みた。というのも、人間が実践する際の主観的志向性と主観的目的性は、経験からもたらされるのではなく、先験的に生じるためである。「この時、超越論的な思索の地平を持ち込むことが必要だ。それは必要であるばかりか、必須であり、ひいては必然的ですからある」。したがって、「こうした経験と先験という異なる視座を含む総体的研究を通じてのみ」、「日常生活の当たり前ははじめて確立されるのである」[呂 2013]。

(4) 我々は政治的な立場から中国の日常が容認され、受け入れられることのみで満足するわけにはいかない(これもすでに容易ではないが)。中国の日常を哲学的に論証したいのである。「我々は日常生活の当然性に一理加えなければならない。この理ができてこそ、我々の伝統民俗、無形文化遺産は真に理にかなったものになり、伝統や民俗に対する偏見を根底から正すことができる」のである。しかし、この理は「わずかな知識エリートの前衛的思想の天才的なひらめきではない」。それは、「このディシプリンの対象がそもそも内包するものであり、このディシプリンが対象とする普通の人々、庶民の主観的意識の内にある。研究者の学術業務は、ただディシプリンの先験的理念を通じて、彼らの先天的観念を意識的に顕在化することのみである」[呂 2013]。言い換

えれば、民俗学が研究する民衆は、日常生活において実際そうである様(実然)とすでにそうであった様(已然)だけでなく、そうであるべき様(応然)と、そうありうる様(可然)をも見ることができるのである。これは「日常生活に存在する、最も普遍的で、庶民が最も注目し、大衆が最もリアルにさまざまな体験をする公正性の問題」でもある[徐 2005: 83]。かりに経験的・実証的なパラダイムに視野を制限すれば、民俗学者は逆にこうしたことを実現するのが難しくなってしまう。

したがって、生活世界と日常概念の実践的条件に還元を試みることは、単に筆者たちの主観的な趣味というだけではなく、中国の現実にとって最も緊迫した客観的な需要なのである。また、理論上その必要性が求められてもいる。そのため、私たちは実践民俗学という一つの学術パラダイムを提起したのだ。中国のような社会において、実践民俗学がまず力を注ぐべきは、日常生活を正常な状態へ戻し、異端とされる常識を二度と常に非ずといった状況へ陥らせないこと、また理を語れない者に語ることを覚えさせ、理性が欠落したあるいは非理性的な生活習慣を理性へ立ち戻らせること、日常の理性化と合理化を促し、すべての人間が自らの理性をもって主体的な言動をとることを許すこと、そしてまず何よりも先に民衆を真の意味で人間とならしめ、また日常生活の主体とならしめることである。この他にも、実践民俗学は学理の上からこうした素朴な理性感情について普及化、明晰化及び純粋化を図り、それらを実践的理性の意味における普遍的な共有知識、実践法則と位置づけ、理性的常識の正当化・制度化された実践を促さなければならない。

こうした方面において、実践民俗学は日常を政治的実践の主な場と見なしてはいるものの、ドイツ語圏諸国の学者とは一線を画している。オーストリアの民俗学者ブリギッタ・シュミット・ラウバーは、理解のままごととミクロ分析の手法によって現在と過去の日常世界を照らし出し、深層的な描写を試みるのがヨーロッパ民族学／人類学(即ち昔の民俗学)の特殊能力だとし、その革新的な任務は、日常を社会発展の協議の場(Verhandlungsort gesellschaftlicher Prozesse)とすることにあるとした[Schmidt-Lauber 2010: 56-57]。ドイツのミヒャエラ・フェンスケは論文集『政治としての日常—日常の中の政治—』を出版しているが、その序論で同書のタイトルがヨーロッパ民族学の3つの関心事を反映するものだと述べている。まずは日常を慣れ親しんだ、ありふれた、当たり前なものを見なすこと、次に日常を政治交渉過程の競技場(eine Arena politischer Aushandlungsprozesse)と見なすこと、そして生活世界の情景へのミクロ研究を通じて、ヨーロッパ民族学がそのディシプリンの知識を以って積極的に現下の政治に参与し、それを創り出すという点を表明することである[Fenske 2010: 9]。だが筆者は、実践民俗学が日常の政治に研究を行う際、その重点は権力闘争という行為の事実にあるのではなく、この行為的事実の目的条件にあると考えている。なぜなら実践では、つねに目的条件が先行し、その後、行為の事実と行為の結果が生じるものだからだ。そもそも日常生活実践とは、民衆がそうあるべき様(応然)とそうありうる様(可然)に基づいて、実現し、実践するそうある様(実然)とそうであった様(已然)のことである。実践民俗学の意味における実践とは、一般的な意味における実践と同義ではない。無論、漠然と語られる活動と同義でもない。それは実践理性的規範の意味における実践、つまり、実践理性の目的論的立場から行われる実践であり、実践理性に関する共有知識が中国で制度的に実践されるよう促すものである。これによりはじめて中国の日常は正常であることが可能となる。そして実践民俗学もまた、表面的な描写や痒いところに手が届かないような、重大な問題を避けるような描写を減らし、民俗学が中国という国で担うべき使命を担うこともできるようになるのである。岩本教授が指摘するとおり、民俗学はそもそも「民俗を対象とするのではなく、民俗を通じて研究する」のであり[岩本 2008]、ドイツ語のVolkskundeも本来は普通の人々の日常生活を研究する「民学」を意味している[畢、岩本 2016]。実際に中国でも、1930年代には江紹

原と樊績によってfolkloreは民学と訳されてもいる[江 1932; 戸 2004: 132-133]。実践民俗学の日常研究はちょうどこの民学の源義へ立ち戻り、それを現代の実践科学の新たな段階と次元にまで引き上げ、「旧パラダイム下における文化的遺民を新パラダイム下の文化的公民へ変える、この転換を完成させることこそが、現下の中国民俗学という学問なのである」[高 2015]。

実践民俗学が見つめる日常概念は、生活世界を土台にする日常である。そしてその日常の中に見出だすのは完全な人間、つまり実践理性的目的を有し、しかも目的条件として公正、正義、自由及び尊厳を必要とする人間である。実践民俗学の日常研究と諸ディシプリンの日常研究の最大の相違点はここにあるのだろう。こうしてみると、実践をめぐる問題が生じる日常と日常の中に生じる実践をめぐる問題、これこそ実践民俗学が中国という国でまず着目し、なおかつ優先的に考慮しなければならない中国固有の問題であるといえるだろう。

## 参考文献

- Bausinger, Hermann, 1996, "Alltag und Utopie", in Wolfgang Kashuba, Thomas Scholze, Leonore Scholze-Irrlitz (Hg.), *Alltagskultur im Umbruch*, Böhlau Verlag.
- 畢雪飛、岩本通弥 2016 「日本民俗学者岩本通弥教授訪談録」『民俗研究』第5期
- 丁陽華、韓雷 2008 「論民俗学中的『生活世界』」『温州大学学报』第4期
- Fenske, Michaela (Hg.), 2010, *Alltag als Politik – Politik im Alltag. Dimensionen des Politischen in Vergangenheit und Gegenwart*, LIT Verlag Dr.W. Hopf
- 高丙中 1994 『民俗文化與民俗生活』中国社会科学出版社
- 高丙中 2015 「中国民俗学の新時代：開創公民日常生活的文化科学」『民俗研究』第1期
- 霍耐特、阿克塞爾 2013 『自由的權利』王旭詠、社会科学文献出版社
- 戸曉輝 2008 「民俗與生活世界」『文化遺產』第1期
- 戸曉輝 2010 『返回愛與自由的生活世界：純粹民間文学卷關鍵詞的哲学闡釋』江蘇人民出版社
- 戸曉輝 2004 「現代性與民間文学」社会科学文献出版社
- 江紹原 1932 「關於Folklore, Volkskunde, 和『民学』的討論」『現代英吉利諺俗及謠俗学』上海中華書局
- 呂微 2006 「民間文学—民俗学研究中的『性質世界』、『意義世界』與『生活世界』——重談『歌謠』週刊的『兩個目的』」『民間文化論壇』第3期
- 呂微 2013 「民俗学的哥白尼範式」『民俗研究』第4期
- 邵卉芳 2012 「『生活世界』再認識」『民俗研究』第6期
- Schmidt-Lauber, Brigitta, 2010, "Der Alltag und die Alltagskulturwissenschaft. Einige Gedanken über einen Begriff und ein Fach", in Michaela Fenske (Hg.), *Alltag als Politik – Politik im Alltag. Dimensionen des Politischen in Vergangenheit und Gegenwart*, LIT Verlag Dr.W. Hopf
- Szymanska, Guido, 2008, "Zwischen Abschied und Wiederkehr: Die Volkskunde im Kulturemodell der Empirischer Kulturwissenschaft", in Tobias Schweiger und Jens Wietschorke (Hg.), *Standortbestimmungen. Beiträge zur Fachdebatte in der Europäischen Ethnologie*, Verlag des Instituts für europäische Ethnologie
- 王傑文 2013 「『生活世界』與『日常生活』——關於民俗学『元理論』的思考」『民俗研究』第4期
- 王傑文 2014 「超越『日常生活』的啟蒙——關於『經驗文化研究』的理解與批評」『文化遺產』第6期
- 徐曉海 2005 『制度公正的日常生活基礎』吉林大学博士学位申請論文
- 岩本通弥 2008 「以『民俗』為研究对象即為民俗学嗎——為何民俗学疏離了『近代』」宮島琴美訳『文化遺產』第2期
- 張翠霞 2011 「常人方法学與民俗学『生活世界』研究策略——從民俗学研究範疇和範式轉換談起」『中央民族大学学报』第5期